

第 3 回

全国果樹技術・経営コンクール

受賞者の概要

主 催 全国農業協同組合中央会
全国農業協同組合連合会
日本園芸農業協同組合連合会
全国果樹研究連合会
財団法人中央果実生産出荷安定基金協会

後 援 農 林 水 産 省
全国新聞情報農業協同組合連合会

受賞者一覧

農林水産大臣賞

岩手県	継枝 弥
愛知県	西三河いちじく部会
和歌山県	古家 名
大分県	杵築市農業協同組合柑橘研究会

農林水産省生産局長賞

北海道	渋谷 忠良
山梨県	御坂町農業協同組合もも部会
静岡県	小野 重雄
愛知県	蟹江 正孝
奈良県	奈良県農業協同組合ハウス柿部会
和歌山県	田中 稔

全国農業協同組合中央会会長賞

山形県	鈴木 繁治
沖縄県	島田 長政

全国農業協同組合連合会会長賞

香川県	白川 敏光
長崎県	有限会社 森晏果樹園

日本園芸農業協同組合連合会会長賞

佐賀県	鏡果実農業協同組合ハウスデコポン部会
長崎県	北高農業協同組合みかん部会

全国果樹研究連合会会長賞

青森県	外川 博史
静岡県	高島 敬司

財団法人 中央果実生産出荷安定基金協会理事長賞

福島県	有限会社(舎) 渡辺りんご園
佐賀県	樋口 久俊

全国果樹技術・経営コンクール実行委員会委員長特別賞

山形県	山形おきたま農業協同組合白鷹あけび部会
神奈川県	飯塚 正晃
山梨県	齋藤 徳彦
鳥取県	中原 信博 中原 久美子 中原 雄一郎
愛媛県	白石 武
福岡県	西見 秀明
宮崎県	馬崎 英明

農林水産大臣賞

○岩手県 つぐえだ わたる
継枝 弥

住所 岩手県稗貫郡石鳥谷町滝田19-83

果樹園面積は5.3haで、りんごは5.0ha、西洋なし0.3haの果樹専業経営である。大規模経営であることから、全園地に摘花剤や摘果剤の散布を行い、受粉にはマメコバチを導入するとともに、品種は、早生はつがる、中生は王林、ジョナゴールド、晩生はふじにして労力配分を図る品種構成になっており、10a当たり労働時間は約179時間と全国平均の約7割程度に省力化が図られている。わい化栽培は園地の86%を占めるとともに、既存園も樹高は2.5m以下に抑える等低樹高栽培にも積極的に取り組んでいる。

また、環境に配慮した果樹栽培実践のため、性フェロモン剤の積極使用による殺虫剤の低減に取り組むとともに、化学肥料の削減と魚かす等の有機肥料・良質堆肥の投入による土作りを行っていることから、平成12年度に岩手県が認定するエコファーマー第1号として、所属する滝田りんご生産組合の組合員とともに認定された。

経営の安定を図るため、販売は多元的に行っており、系統出荷を柱に、特に晩生種のふじは自家冷蔵庫を活用し贈答品や翌年5月までのJA産直での販売を行っている。

○愛知県 にしみかわいちじくぶかい だいはやしや のむら とみお
西三河いちじく部会 代表者 野村 富夫

住所 愛知県安城市御幸本町6-15

栽培面積は105ha、参加戸数は554戸で構成された集団であり、水田転換作目として奨励されたいちじくを共同販売・共同計算することを目的として昭和53年に組織化された。部会発足時に比べ、栽培面積が2倍、出荷数量が2.5倍、販売額は4倍に増加しており、平成12年の販売額は16.6億円である。

栽培いちじくの7割は転作田に作付けされており、全国への波及も含めて稲作転換作目として定着させた功績は大きい。

栽培技術の高位平準化を図るため、生育時期に合わせた栽培講習会や優良圃場の巡回を行い、露地、ハウス栽培ごとに栽培暦を毎年作成し、全農家に配布している。品種は榊井ドーナズが主体であるが、地域で育成された早生種のサマーレッドもハウス栽培や規模拡大農家に普及させ、所得向上と作業分散を図るとともに、露地・ハウス栽培を組み合わせた長期間供給体制を確立した。

品質向上を図るため、統一的な選果基準を設定し、検査員は部会員以外とする等選果の厳正、公平を期している。また、いちじくは熟度の進行が早い上、傷みやすいため、全国的な流通が難しかったが、昭和59年度から、予保冷蔵庫の整備をはじめ予冷・保冷システムを確立し、広域出荷体制を整えたこともあって、京浜・中京・北陸市場でのシェアは23年間1位を保持している。環境に優しい農業を実践するため、安城市では、施肥量の削減を始めとし、いちじく等果樹と街路樹の剪定枝を粉砕し、堆肥化する施設も本年度から稼働している。

○和歌山県 ふるや 古家 あきら 名

住所 和歌山県有田郡金屋町長谷川709

果樹園の面積は4.03haで、うんしゅうみかん2.09ha、いよかん等中晩柑1.54ha、うめ0.4haの果樹専業経営である。

出荷販売時期が9～1月のうんしゅうみかん、1～3月の中晩柑、6～7月のうめを栽培することにより、経営のリスクと労力分散を図っている。連年高品質安定生産のために、マルチ栽培を地域に先駆けて導入、平成3年から本格的に実施するとともに技術的リーダーとして地域への普及を図った。このため、当町のマルチ栽培率は有田地域では最も高くなっている。さらに、労力配分の分散化のため導入した極早生みかんについても、平成10年頃からマルチ栽培に取り組み、水分管理による減酸対策及び着色の前進化を図り、高糖度果実生産技術を地域で初めて確立した。

栽培管理は間伐の実践と弱剪定を主体とした基本管理を徹底し、低樹高仕立てにより、労力を必要とする収穫作業も効率化されている。園内道を整備し、収穫物の運搬や肥料等生産資材の搬入も軽作業で行えるほか、多目的スプリンクラーを園地の87%に設置して、薬剤防除に活用し、省力化を図っている。

また、うんしゅうみかんの高品質安定生産のため、稲わらを連年投入する等継続的に有機物を補給している。

○大分県 きつきし 杵築市 のうぎょうきょうどうくみあい 農業協同組合 かんきつけんきゅうかい 柑橘研究会 だいひょうしゃ 代表者 みよし 三好 そうじ 宗司

住所 大分県杵築市大字杵築740-1

研究会参加戸数は314戸で、うち専業農家は176戸である。かんきつ栽培面積は178haで、うんしゅうみかんが133haと大半を占め、うちハウスみかんは48haである。総出荷額は19.6億円で、うちハウスみかんは16.7億円である。

かんきつ生産者の高齢化、後継者不足の進行に伴い、農協、市では、平成7年より規模拡大や新規参入の促進のため、リース農園方式を全国に先駆けて取り組んでおり、そのプロジェクトチームに当研究会は組織をあげて参画し、特に「サラリーマン並みの所得と労働時間」の実現のための具体的提案と実践が農協、行政を動かす原動力になった。リース農園は市農業公社が農地を借り上げ、農協が鉄骨ハウスを建設し、生産者は農地とハウスをリース契約で借り、20年分割で借料を支払うもので、土地・施設を取得せず参入できることから、花き、野菜等他の園芸作物へも拡がりをみせている。当初は団地の確保に様々な困難があり、所期の目的達成が危ぶまれたが、研究会役員による説得活動が効を奏し、現在は既に5団地が形成され、71棟39戸でハウスみかんの生産が行われている。

栽培技術面では、リース農園のハウスはセンサーによる遠隔監視システムによって温度制御がなされ、管理時間は通常の50%、重油消費量も55%に抑えられている。また、研究会では、各園地のみかんの結果母枝分析を実施し、適時の加温開始により、各農家の収量を確保している。環境面では、粘着トラップ利用によるアザミウマ類の発生調査を行い、早期防除によって防除回数を減少させ、被害を軽減している。

農林水産省生産局長賞

○北海道 しぶや ただよし
渋谷 忠良

住所 北海道増毛郡増毛町大字暑寒沢村236

経営面積は5.16haで、りんご2.95ha、おうとう1.28haを主体とする果樹専業経営である。

りんご、おうとうのほか西洋なし、ぶどう、もも、プルーン等の品目を組み合わせて栽培し、消費者への直売により経営の安定化を図っている。

りんごは着色管理の効率化及び観光果樹園用に黄色系品種を積極的に導入するとともに、摘果剤の使用、わい性台木の導入、高所作業車を活用し、管理作業の省力化を図っている。他の道内産地に先駆けて、交信攪乱剤やフェロモントラップを使用することにより殺虫剤の散布回数を低減する等環境に優しい農業を実践している。

おうとうは大粒種「南陽」をいち早く導入し、地域のブランドとして確立するとともに、生産の安定化のため雨よけハウス栽培を確立し、品質の向上を図っている。

経営を合理化するためパソコンを導入し、複式農業簿記、労務管理、顧客管理に活用しており、さらにホームページの開設等情報発信にも力を入れている。

○山梨県 みさかちのうぎょうきょうどうくみあいももぶかい だいひょうしゃ ねづ よしゆき
御坂町農業協同組合もも部会 代表者 根津 善行

住所 山梨県東八代郡御坂町夏目原620

部会員は994戸で、うち専業農家は255戸である。果樹栽培面積は822haで、うちももは411haと約5割を占めている。

部会の発足と合わせて昭和60年から、「もも振興計画」及び「もも高品質栽培に向けての栽培指針」を5年ごとに策定することにより、各農家への栽培技術の徹底と高品質生産を実践してきた。

地域に適した新しい品種の導入に当たっては、地域への適応性や栽培技術の確立を目的として部会内にモデル園やモデル地区を設置し、地区のリーダーが統一的に指導することで農家に対する普及啓発を効率的に行っている。この結果、地域オリジナル品種として「みさか白鳳」、「黄美娘」及び「みさかつ娘」を育成し、市場で高い評価を得ている。平成10年から交信攪乱剤利用による減農薬栽培を徹底し、現在ではもも栽培面積の約70%のは場で使用されている。

平成5年より3か年計画で光センサー選果機を導入したことにより農家間の品質格差が明らかになったため、平成9年には「もも高品質生産に向けての栽培指針・光センサー選果機の有効利用による産地強化」を作成、部会員全戸に配布し、更なる品質向上を図っている。

○静岡県 おの しげお
小野 重雄

住所 静岡県引佐郡三ヶ日町上尾奈539

経営面積は3.09haのうんしゅうみかん専作経営で、品種は青島温州が2.22ha、興津早生が0.87haである。

園内道の設置や緩傾斜園地の改良等園地の基盤整備を進めた結果、現在約90%の園地にスピードスプレー等の大型作業機械が乗り入れでき、薬剤散布や施肥、資材の搬入から収穫したみかんの搬出・出荷までを機械化し、管理作業を省力化した。

このため、10a当たり労働時間は155時間と全国平均の約75%まで低減している。

栽培品種は青島温州と興津早生の2品種に統一し、きめ細かな摘果や枝吊りを実施するとともに、品質向上を図るためマルチ栽培の導入に積極的に取り組み、既に全園地の42%をマルチ化する等高品質安定生産を実現してきた。傾斜園地からの土壌流亡を防止するため園内道等の石積み、石畳を整備し、土留めにはリュウノヒゲを活用する等園地景観にも配慮した保全対策を講じてきた。

このように作業環境を整備してきた結果、地域では大規模経営にもかかわらず、夫婦2人でほとんどの栽培管理を行っている。

○愛知県 かにえ まさたか
蟹江 正孝

住所 愛知県大府市長草町西忍場 1

経営面積は4.25haの果樹専業農家で、ぶどうは1.65ha、うんしゅうみかんは2.3ha、中晩柑は0.3haである。

巨峰の簡易被覆栽培を昭和57年からはじめ、地域に先駆けて技術を確立し、需要期である盆前の出荷量を確保するとともに、作業労力分散による規模拡大を図ってきた。消費者嗜好に合わせた新しい品種の導入も積極的に行っており、高糖度のロザリオ・ピアンコや新品种の安芸クイーン等幅広く栽培している。

かんきつは、栽培面積の5割、1.3haに並木植え高畝栽培を導入し、スピードスプレーによる防除や運搬車による収穫物の運び出し等作業の軽労化を進めた結果、10a当たり労働時間は従来より20時間短縮した。

経営については、経営主は主に栽培管理、妻は経営記帳及び雇用者の管理を行う等家庭内の役割分担を明確にしている。

販売は都市近郊の立地を生かし、消費者に対して直売や宅配及び市場への直接出荷を主とし、ぶどうは7月中旬のハウスデラウェアに始まり9月中旬まで巨峰を販売し、かんきつ類は11月の極早生うんしゅうみかんから2月の太田ぽんかんまで長期化を図った。

○奈良県 ならけんのうぎようきょうどうくみあいハウスかきぶかい
奈良県農業協同組合ハウス柿部会

だいひょうしゃ だづ たかし
代表者 太津 隆司

住所 奈良県五條市今井1丁目11番地-38

ハウス面積は15.8ha、農家戸数は41戸、うち38戸が専業経営である。

本県で育成された刀根早生を用いたかきのハウス栽培を全国に先駆けて実施した。新しい果実商品であるハウスかきは生産から販売まで一貫した指導体制が必要であることから、市町村、農協の枠をこえて県下の生産者が結集し、平成2年に共選・共販体制を発足させた。

現在の作型は7月から収穫できる早期加温と8月中旬から収穫する普通加温の2作型で労力分散を図るとともに、継続的に安定出荷できる体制を確立した。また、ハウスの加温や水分調節等の栽培管理マニュアルを作型別に作成し、農家に指導している。

脱渋にともなう果実軟化の発生を抑えるため、高温期は固形アルコールを用いた樹上脱渋処理を、8月下旬以降は独自に開発した高温アルコール併用脱渋法を用い商品性を高めている。

販売当初は消費者になじみのあった東北、北海道を中心に宣伝活動を行い、その実績をもとにして関東の市場に「食べておいしい柿」としてマーケティング活動を行い、販路拡大を図った。

○和歌山県 たなか みのる
田中 稔

住所 和歌山県田辺市中三栖2120-1

経営面積は2.6haで全面積うめを栽培し、収穫したうめは全量梅漬けにして農協へ出荷している。

うめは樹齢が古くなると生産性が極端に落ちるため樹体の更新に努め、樹齢構成別に幼木園、成木園、次期改植園を各々3分の1の割合となるよう計画的に改植を行い、労力を結果樹園に集中することにより高品質の大玉果を連年安定生産している。

土作りに熱心に取り組む、バーク堆肥や苦土石灰を毎年投入してきた結果、10a当たり収量は地区の平均に比べて40%近く上回っている。

また、省力化を図るため、施肥は肥効調整型肥料を施用するとともに、ナギナタガヤ等緑肥作物による地力維持を図り、除草剤の使用削減に努めている。

園地全体に防風ネットを敷き詰める方法をいち早く取り入れ、収穫時間の短縮と果実に土が付着することによる品質低下を防いだ。

うめの加工に当たっては、漬け込み塩度の測定には比重計を使用し、干しあげ乾燥の際には屈折糖度計を用いる等良質の梅干生産に取り組んでいる。

全国農業協同組合中央会会長賞

○山形県 すずき しげじ
鈴木 繁治

住所 山形県東田川郡羽黒町大字上野新田字上台80

経営面積は12.31haで果樹園は3.2ha、うちブルーベリーが3haである。

ブルーベリーを県内でも先駆的に導入し、地域特産果樹として定着化を図ってきた。栽培当初は生果での販売が中心であったが、規模拡大とともに独自にジャムやジュース等の加工品開発に取り組み、8年間かけて平成8年に加工技術を確立した。現在は収穫量の8割以上を加工しており、直売所を設ける他、地元の農協、生協等を通じて販売している。

早生から晩生まで15品種を栽培しており、経営面では収穫期間を延長し、労働力の分散を図るとともに、観光果樹園の開園期間を長期化し、収益を安定化させた。

ほ場には作業道を設け、農業機械による収穫物の搬出、運搬等を容易にしている。また、病害葉を摘み取り、虫害防止のために落果した果実を拾い集める等耕種的防除を行い、無農薬栽培を実践している。

○沖縄県 しまだ ながまさ
島田 長政

住所 沖縄県石垣市登野城2389

果樹園は0.92haで、マンゴー0.65ha、シイクワシャー0.27haを栽培している。徹底した土作りのため10a当たり毎年5トンの堆肥と6トンの敷き草を園地に投入するとともに、中耕を実施することとボカシ肥料を投入することにより細根作りを徹底し、樹勢強化を図っている。

マンゴーは樹幹の広がりが早く、初期収量が高い特性を持つことから、計画密植をして未収益期間を短縮するとともに、施設化のための低樹高仕立て栽培を確立した。この結果、降雨による病害果の発生を防ぎ、樹上で果実を完熟できるようになり、完熟果実を「石垣島ポトリ果マンゴー」ブランドで全国へ販売している。

また、シイクワシャーは健康維持・増進効果が評価され、ジュースや料理用として需要は拡大している。

全国農業協同組合連合会会長賞

○香川県 しらかわ としみつ
白川 敏光

住所 香川県三豊郡高瀬町大字上麻 8 1 4 - 5

果樹園は3.75haで、うちうんしゅうみかんは3ha、キウイフルーツは0.3ha、ももは0.45haとうんしゅうみかん主体の経営である。傾斜地の改良や園内道の整備を進め、園地を集約するとともに、かん水用溜池の整備等によって、作業性の向上や軽作業化を図っている。

うんしゅうみかんの「石地」やももの「はなよめ」等新品種の試作を積極的に行っており、地域における優良品種の普及拡大に大きな役割を果たしている。

薬剤散布やかん水にスプリンクラーを設置する等管理作業の省力化を図るとともに、品種と樹種の組合せ等により出荷期間を拡大することにより労力の分散を図り、自家労力のみで栽培管理作業を行っている。

○長崎県 ゆうげんかいしゃもりやすかじゅえん だいひょうしゃ もり てつろう
有限会社森晏果樹園 代表者 森 哲朗

住所 長崎県西彼杵郡多良見町佐瀬郷 1 1 8 7 - 1

果樹園面積は5haでうんしゅうみかんは4.6ha（極早生0.8ha、早生1.2ha、普通2.6ha）中晩柑は0.4haである。

平成5年より極早生（岩崎）、早生（原口）、普通（青島温州）等の優良系統への改植を進め、品質を向上するとともに労力を分散し、収穫の長期化を図ってきた。

園内道の整備は全園地の94%、延べ7kmを実施することにより、スピードスプレヤーの導入や軽トラックによる運搬作業が可能となった。このため、10a当たり労働時間は全国平均の70%程度の152時間と省力化を図ってきた。

極早生・早生は100%マルチ栽培を実施していることから、地域ブランド商品等高品質果実の生産に寄与し、所得向上につながっている。

経理事務については多良見町農業法人協議会に加入し、20社共同で専従の税理士へ委託している。

日本園芸農業協同組合連合会会長賞

○佐賀県 かがみかじつのうぎょうきょうどうくみあいほうすでこぼんぶかい
鏡果実農業協同組合ハウスデコポン部会

住所 佐賀県唐津市半田2565 だいひょうしゃ 代表者 ならだ 檜田 まさかず 正一

参加農家32戸は全て専業農家であり、ハウス面積は5.7haである。

かんきつの周年供給体制を確立するため、うんしゅうみかんと労力競合のないハウスデコポンの導入を計画的に行い、平成6年より13年までハウス建設を各種事業を活用して行ってきた。

毎年度、生産者自らの協議により加温時期を決定するとともに、果実肥大・品質調査については役員による園地確認を実施している。

デコポンは土作りが重要なことから、各農家のハウスの土壌分析を3年ごとに実施するとともに、ピートモス、客土、敷きわら等の施用により土壌物理性を改善し、生産を安定化した。ハウスには二重カーテンや自動温度開閉装置等を設置して省力化を図った。

また、ハウスの新設や改植の際には部会員共同で作業を行う等協調性を生かした活動を行っている。

○長崎県 ほっこうのうぎょうきょうどうくみあいみかんぶかい
北高農業協同組合みかん部会 だいひょうしゃ 代表者 ふじわら 藤原 くにあき 邦明

住所 長崎県北高来郡高来町三部老名284-1

参加農家は281戸で、うち専業農家は31戸である。

果樹園は122.5haでうんしゅうみかんは107.5ha（露地105ha、ハウス2.5ha）、中晩柑が15haである。

平成3年に襲来した大型台風により甚大な被害を受けたものの、立地条件を活かした復興計画を組織を挙げて作成し、優良系統への更新、園地改造等基盤整備の必要性が認識された結果、栽培面積の56%に園内道を設置し、園地改造を32%、改植を13%実施した。園内道の設置や改植作業等には、部会員自ら構成した作業班が請負作業を行うことから、工事費が軽減された。

また、園内道の整備によりスピードスプレーヤーを14台導入し、作業班が共同防除を実施することにより省力化を進めている。光センサー選果機が平成12年度に導入され、外観に加え糖度・酸度も評価の対象となったため、品質重視の生産意欲が高まっている。

全国果樹研究連合会会長賞

○青森県 そとかわ ひろし
外川 博史

住所 青森県南津軽郡平賀町大字広船字山下32

経営面積は3.4haのりんご専作農家で、栽培品種はふじ1.7ha、王林0.55ha、つがる0.45ha、ジョナゴールド0.45ha等である。りんごの高品質・多収を目標に昭和44年から既存園及び水田転換園でのわい化栽培に取り組んだ結果、現在わい化率50%に達している。栽培面積の90%を無袋化し、省力化を進めるとともに、わい化園は葉摘み労力を削減するため、着色優良系統を導入している。

わい化栽培では成木で樹高3m、側枝数25本以上とし、主幹と側枝のバランスを保つことで果実品質、生産性、作業性等を高めている。

結実の確保を図るためマメコバチを増殖利用することにより受粉作業を省力化した。

また、パソコンを早くから導入し、経営記帳や青色申告等に活用する等、経営改善に役立てている。

○静岡県 たかしま けいじ
高島 敬司

住所 静岡県沼津市西浦久料128

経営面積はうんしゅうみかんが2.2haで、うち寿太郎温州は1.1ha、青島温州は0.65ha、ぼんかんは0.15haのかんきつ専業農家である。

収穫時期がほぼ同じである青島温州を11月下旬、寿太郎温州は12月下旬から収穫するように栽培管理を行っており、収穫期間の分散により労力の競合をなくした。また、みかんの簡易貯蔵方法を独自に改良し、貯蔵管理労力を軽減したことにより、収穫時の労力が確保され、年内出荷量を増加させることができた。

ミニバックホーによる自力施工で階段畑を緩傾斜化し、園内道を整備するとともに、わい性台木であるヒリュウ台をいち早く導入することにより品質の向上を図り、省力化を進めた。基盤整備・機械化による作業効率の向上と栽培管理・貯蔵管理の労力削減により家族3人でほとんどの作業をまかない、10a当たり労働時間も約150時間と全国平均を3割程度下回っている。

財団法人 中央果実生産出荷安定基金協会理事長賞

○福島県 ^{ゆうげんかいしゃ やまきち わたなべりんごえん だいひょうしゃ わたなべ さだみ}
有限会社（舎） 渡辺りんご園 代表者 渡辺 定己

住所 福島県岩瀬郡鏡石町高久田55

果樹園2.95haのうちりんごは1.8ha、ももは1.15haである。りんごは園地の大部分が成園になっているが、ももは成園0.25haのみであり、今後成園化して収益向上が期待できる。

複合性フェロモン剤の活用と草生栽培による耕種的防除との組み合わせで殺虫剤散布回数の削減に積極的に取り組んできた。また、堆厩肥等の有機物を施用し、土中有用菌の活用による地力の向上を図るとともに、化学肥料を減らすことによるコストの削減と高品質果実生産に努めている。

代表者は「りんご」経営を、後継者は「もも」経営を、代表者の妻は「経営管理」を担当する等家族の責任分担を明らかにしており、平成12年には家族経営協定を締結している。

販売は直売と宅配が主のため、パソコンを導入し、顧客情報を把握するとともに、顧客のニーズに基づいた果実作りと計画的な販売を行っている。

○佐賀県 ^{ひぐち ひさとし}
樋口 久俊

住所 佐賀県伊万里市南波多町大川原3633-3

果樹園2.48haのうち、日本なしは1.6ha、ハウスみかんは0.88haである。

日本なしは台風被害等を避けるため、トンネル被覆栽培を導入し、収穫の前進化を図るとともに、台風の被害のない6月に出荷できる果実としてハウスみかんを平成3年に地域ではじめて導入した。

夫婦と両親の4人で経営しているため、労力の配分を考えて、早生なしの幸水が収穫される7月中旬までに、ハウスみかんの出荷が終了するよう、加温時期を調整している。また、園地の土壌分析を行い、診断結果を土作りに生かし、樹勢の強化や高品質果実生産に結び付けている。省力化を図るためスピードスプレーヤーを導入するとともに、日本なしではシンクイムシ対策として0.8haにフェロモントラップ（コンフューザーP）を設置し、農薬散布回数の低減に取り組んでいる。

全国果樹技術・経営コンクール実行委員会委員長特別賞

○山形県 やまがたおきたまのうぎょうきょうどうくみあいしらたかあけびぶかい
山形おきたま農業協同組合白鷹あけび部会

住所 山形県西置賜郡白鷹町大字下山395-2 代表者 だいひょうしゃ おくやま くにお 奥山 国男

部会員は19戸、あけびの栽培面積は1.8haである。昭和61年に部会として発足、出荷量は現在3倍に増加している。

優良系統の選抜を部会自ら行い、昭和62年には8月中旬～9月上旬に収穫できる極早生系統の「鷹紫」を育成した。市場の評価を高めるために共同選果を行い、販売は運送業者の協力を得て多市場に小口出荷する等多様化している。あけびを食材として広く浸透させるため、出荷箱ごとに調理法や効用を記したパンフレットを入れ、消費宣伝を兼ねたメッセージとして利用している。

○神奈川県 いづか まさあき
飯塚 正晃

住所 神奈川県伊勢原市善波497

経営面積1.64ha、うちうんしゅうみかんは1.1ha、中晩柑は0.54haである。

都市近郊の立地条件を生かして販売は直売と宅配を主としている。また、園地の一部を観光みかん狩り園とし、昭和50年から14戸の農家と共同で「伊勢原市農協みかん狩り組合」を結成しており、当園の年間入園者は5,000名を超えている。かんきつ栽培では北限に位置するため、樹勢の強化には力を注ぎ、敷きわらで細根を増加させるとともに、間伐で樹形改造する等の対策を講じている。

顧客のニーズに応えるため、うんしゅうみかんの極早生系統から始まり、ぼんかん、清見等の中晩柑類まで長期間販売に対応できる生産体制を確立した。

○山梨県 さいとう のりひこ
齋藤 徳彦

住所 山梨県山梨市小原東62

果樹の栽培面積は1.39haで、うちもも0.97ha、ぶどうは0.42haである。

園地は2か所に集積し、園内道を整備したことにより、スピードスプレーヤー等の導入を始め、農業機械の活用により労働時間は県平均の8割程度に低減している。

病虫害の発生予察を独自に行うとともに、平成10年からは性フェロモン剤を使用し、殺虫剤の散布回数を削減している。

土作りのため、全園地草生栽培に取り組み、土壌診断結果に基づき有機質肥料を主体とした施肥を行っている。

○鳥取県 なかはら のぶひろ なかはら くみこ なかはら ゆういちろう
 中原 信博 中原 久美子 中原 雄一郎

住所 鳥取県東伯郡大栄町大谷351

日本なし2haの専業経営で、ハウス0.4ha、露地1.6haである。園地は1か所にまとまっており、園内道を整備するとともに、簡易散水施設を園全体に設置しており、労働の軽減化を図っている。

幸水、豊水等の赤なしを中心に早生から晩生までの品種を組み合わせることにより、受粉、摘果、収穫作業等の労力分散を図った。風害や病害虫等の被害低減と生産安定を図るため、網掛け施設を導入し、さらに黒斑病耐病性のゴールド二十世紀を積極的に導入するとともに、交信攪乱剤を使用し、薬剤散布量を約3割低減している。

平成3年からはパソコンを利用した複式簿記を採用し、経営分析に役立てている。後継者が成人したことから家族経営協定を結び家族が働きやすい環境を作った。

○愛媛県 しらいし たけし
 白石 武

住所 愛媛県越智郡菊間町種

経営面積1.9haで、うちでこぼん0.8ha、伊予柑0.9ha等のかんきつ専業農家である。

養豚経営からかんきつへ経営転換したため、既存の施設・機械を有効利用し、畜舎・管理棟の改築により経営転換投資コストの低減を図ってきた。

防除労力の省力化を図るため、スプリンクラー施設を設置し、病害虫防除及びかん水管理を徹底して高品質生産に取り組んでいる。ホイローラーによる堆肥の切り返しや運搬作業能率を向上し、土作りに必要な低コストの良質堆肥製造を自力で行っている。また、堆肥の投入時のタコツボ堀や改植園の抜根時に小型穴堀機を活用し、作業の省力化を図っている。

○福岡県 にしみ ひであき
 西見 秀明

住所 福岡県浮羽郡吉井町大字富永1101

経営面積は4haの柿専業農家である。品種は富有、松本を主に早生の伊豆等を栽培し、自家労力を有効に組み合わせて、作業の平準化を図っている。

農薬散布の低減をめざし、除草は草刈り機を使用、主要病害虫のフジコナカイガラムシ対策は冬季に粗皮を削り、越冬害虫を除去することによって発生を抑える等耕種的防除を行っている。家族労働を中心にするものの摘蕾等の作業は雇用労働を活用する等大規模経営においても省力化を図っている。

○宮崎県 ばさき 馬崎 ひであき 英明

住所 宮崎県臼杵郡日之影町岩井川945-1

果樹園面積2.3haで、うちくり2.1haである。

早生種から晩生種までの品種構成により連続収穫と労力分散を実施するとともにイタリアン草生栽培の実施、整枝剪定の徹底と低樹高栽培により、省力化・低コスト栽培に取り組んでいる。

傾斜地での収穫作業は手作業により大変な労力を費やしていたが、収穫ネットの導入により大幅に短縮できた。また、剪定枝は粉碎し、堆肥化することで病害虫発生を防いでいる。